

音で来訪を告げ、叔父は、親愛する兄にささげるの追悼文を読んでもくれた。「義兄の会いたいのは姉でしょう。姉は八十三歳なので来られなかった。姉は六人の子供をみな育てました。いつの日にか姉も義兄のところに逝きます。そのときはかわいがってあげてください。これから義兄のあなたをお連れして一緒に故郷に帰りましょう」と言つて号泣したそうである。

高野山に少年石童丸が仏門に入ったその父を刈萱に道探し求めた心情に似て北満横断しての親に孝の佐藤彰恭氏の姿は煌煌しくみえた。

(社引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

## 北朝鮮鎮南浦疎開者三十人救出

東京都 神代 忠正

私の生まれは佐賀県で、平成時代に取り残された県のような気がしてなりません。こんなとき、青天の霹

靨とても思われる平成六年八月二十一日、夏の高校野球決勝戦で数百万人の野球ファンをテレビに釘付けにした。佐賀代表佐賀商業高校対鹿児島代表樟南高校との試合に、八回まで四対四の同点で九回表を迎えて、あの劇的な満塁ホームランを放つた主将の西原君が、深紅の優勝旗を故郷佐賀に持ち帰つたのがなよりの県の表徴になりました。

その学校の北約四キロの田園の里の武士の家の四男坊として、亡父のスパルタ教育を受けながら育つたのであります。私の幼少のころ、佐賀は軍人王国で海軍では古賀元師、陸軍では真崎大将などきら星のごとく実在し、叔父も海軍少将という地位におり、一にも二にも軍人とはめはやされたものですから、自然と軍人になる希望を持つようになり、中学在学中、海軍兵学校及び陸軍士官学校をそれぞれ受験したが、幼少のころの中耳炎で体格検査で両校ともはねられ、やむなく一年間浪人生活を送る運命になった。何かと父と口争いを繰り返すことが多くなり、仕方なく大牟田市に叔母がいたのでそこで半年ほど暮らし、叔母の友達の貨

物船の船長さんに頼んで船に乗せてもらっているうち、いろいろ考えが変わり、帰郷して父にわびを入れ勉強して上級学校に進もうと思った。

そこで、帰郷の旅費を稼ごうと思いたち有明海の埋立工事の日雇いをして生まれて初めて働いたので。当時は機械などなく皆手作業でレールの上を走るトロッコに大きな角スコップで海砂の山から土砂を積み込み、いっぱいになったら手押し車で海まで運ぶ。トロッコから土砂をひっくり返して落とし、後続のトロッコと衝突しないように、急いで切り替え地点まで空箱のトロッコを押し戻す。一日約二・三十回繰り返すので、手には血豆ができ、体はくたくた、もらった金はたったの五十銭で、どんぶり飯一杯十銭、うどん一杯五銭の時代だからまあまあでした。ここで約三日働き、帰郷旅費を作って叔母の家をはなれ、徒歩にて我が家に帰った。

干拓の仕事などの話をして、こんな仕事は人力でやるものじゃない機械でやらねばと施行方法を父に聞いてもらった。是非機械施行をする学校はないかと、全

国の国立専門学校を調べたら、たった一校だけ、三重県の津市に三重高等農林学校の農業土木科というのがあることが分かった。県庁の技手の資格と農学校の先生や中学校の数学の先生の資格がとれるとあって、是非この学校を受験させてほしいと父に頼み、約半年の受験準備期間があったので猛勉強した。九州帝国大学で試験を受け見事入学でき、西日本新聞に合格名が記されたときの喜びはまだ忘れることができないのであります。なにしろ四十人のうち無試験入学者が八人いて残り三十二人が受験で入学したのであるから、受学者数百数人で約二十五人に一人の割合の難関であった。この学校の入学の一年間は寮生活で、一年修了のとき、寮のストームをやり舎監に呼ばれてしかられ、一年で寮を追い出され、やむなく二年からは下宿生活に入った。二年からは実習の時間が多くなり、勉強のほか部活動の柔道も多く一年で初段を免許され、二年で二段に進み他校試合も多く、渡満出発のときは応援団が激励にやってきて応援歌を歌い送別してくれたのである。今思うと我が青春の一番楽しかった時代でし

た。三年間はあつという間に過ぎ、就職選考が始まり内地にくすぶるより、中学時代の悪友とおう歌した馬賊の歌、「俺も行くから君も行け、狭い日本に住みあいた、波のかなたにや支那がある、支那に四億の民が待つ」：渡りに舟、教授より満州拓殖公社に入社するよう七人が推薦された。東京支社に面接に行ったら、渡満の前に水戸の内原の加藤完治先生のもつとで、精神訓話や実習を一カ月受けるよう命ぜられた。日本各地の学校卒業生が約四十人ほど集まり、鋏を持って開墾させられ、手に豆を作りながら働かされた。最後は筑波山に登山し、弥栄と万歳三唱し、下山解散、実家に帰り渡満の準備をし、四月中旬に満拓本社に出社した。それぞれ部課に配属させられ、私とあと一人が土地課に入り、約一週間ほどで北満の密山県に入り、ソ満国鏡の関東平野ぐらゐの土地の精密測量に入った。もちろん治安が悪いので拳銃を持ち、匪賊の帰順兵二十人の機関銃、小銃の武装兵を引き連れて山々に配置の上仕事に励み、約八カ月後の十二月末に新京で徴兵検査を受けた結果、入隊通知が届いた。

ところが、入隊先が台湾の台北の独立山砲兵連隊で一月十日となっているので、当時は飛行機はないのであわてて帰国用意で本社まで三日、郷里まで二日、台湾まで二日、計一週間で台湾に行き、兄の二男坊に付き添ってもらい、着衣を全部渡し軍服に着替え入隊した。零下三〇度の北満から常夏の台湾に入り、まず体を慣らすのに苦労しました。入隊時は星一つの二等兵三カ月の一期の検閲で一等兵に進み、二期の検閲で日支事変に送られ、上等兵にて転戦すること二年で台湾に帰台。満期除隊かと思つたら大演習、約一週間台湾の南端ガランピンより北端キールンまで強行軍、おかしいおかしいと思つていたら終了後、御用船に乗せられポーコ島に連れて行かれる。ここで大船団を組んで南へ南へと進み、十二月半ば大本営発表、「英米、和蘭と開戦、我々は比国リンガエンに敵前上陸を敢行する」との発表だった。深夜幸い無血で上陸し、一路首都マニラへと戦火を交えながら前進し、十二月のクリスマス前の日にマニラに突入した。マニラに居ること数日で、更に船に乗せられジャワ(今のインドネシア)

に向かう。ここで海戦があつて、敵の軍艦が沈められ敵兵が海に泳いでいるのを見て、上陸もまもないと思つていたら、上陸用舟艇にのせられスラバヤに上陸、首都に向かつて前進した。ここに約八カ月ほど滞在中で、更にチモール島に前進した。ここからオーストラリアが見え、オーストラリア上陸の前に昭和十八年ミッドウェイ海戦が始まる。我が軍が惨敗し敵国の空爆が盛んになったとき、運よくも交代の兵隊がきて除隊の通知を受けた。帰国の乗船を待つ間B29の空爆を受け、五年間無事でいた同僚のうち三人ほど戦死、十数人負傷した。幸い私は小豆ぐらいの破片が腕に入ったくらいに傷で無事乗船し、約三カ月かかって本国郷里に帰り着いた。そのときは沖縄は米軍が上陸し、九州もまもなく戦火にやられると思つて、十九年満拓公社に復帰しました。

もはや頭の中は南洋ボケで空っぽで、測量の対数計算もできないので、体を使う開墾課に入れてもらった。ハルピンのドイツ人経営のトラクター会社に三カ月ほど勉強に派遣され、終了後錦州の盤山というところに

約二万町歩の開墾のため出張しました。昭和二十年三月に結婚のため郷里の佐賀に帰り、五月五日空襲の最中に結婚式をあげた。新婚旅行の代わりに渡満旅行を行い、新京にて社宅をもらい新婚生活を始めたのであるが、八月にソ連が日本に宣戦布告し満州に攻めてきた。

八月五日に赤紙の召集令状が届き、勤め先の満拓公社の人事部にその旨を提供。新京の郊外に集合場所を指定され、そこで軍服、軍帽、帯革、帯剣、軍靴、階級章を渡され軍装に整え、憲兵から指導され、トラックに乗って奉天の北部の野戦重砲兵連隊のある兵舎に連れて行かれた。指揮官のあいさつを受け軍隊の生活に入ったが、驚いたことに野戦重砲が一門もなく、もちろん弾丸もない。あるのは騎兵銃が數十丁あるのみで弾丸があるのかさっぱり判明せず、帯剣は竹先で、あの勇猛なソ連兵と戦うのかとあきれてものがいえなかった。しかも召集を受けた兵隊のほとんどが第二乙種のひ弱い人ばかりで戦争の経験もない、こんな人たちに一夜漬けの訓練を行うことができるのか

と思った。

既にソ連軍は国境を越えて破竹の勢いで襲撃して来ているのである。毎日本操と食事と兵器到着を待つのみで過ごしているうちに八月十五日がやってきた。夜の点呼のとき、将校が直立不動の姿勢で敗戦の勅諭を奉じ、「戦争は終わったんだ。君たちの行動は明日発表する」と言うことで点呼は終わったが、夜の間に本部と電話相談したのだと思うが明けて点呼の際、「本隊は解散ということになり、諸君たちはわずかの日はあったか御苦労様でした。ついでには各人に携帯食糧三日分と毛布一枚に帰郷旅費数十円を渡すから受け取りにこい」ということで旅費の受領に行った。三三五五と別れを告げ近くの新城子駅だったと思うが、そこから新京までの切符を買って汽車に乗った。

新京駅について驚いたことには駅が静かすぎたのでよく見たらソ連軍が駅を占拠、警備に当たっていた。日本人の顔はほとんどなく満人と朝鮮人ばかりで、これは大変だと馬車に飛び乗って駅に近い公社の友人宅を訪ね、一晚中話明かし朝食後、我が家に行つたらこ

れまた驚いた。足の踏み場もなく荒らされ何ひとつめほしいものがない。略奪に遭っていた。これは満人か、引き揚げてきた日本人がやったのかはさだかでないが、着物、日用品、布団、日本刀、包丁に至るまで何もなく、あるのは書籍と記念写真帳だけ、写真を拾い集めて、親類の福昌公司フクチャウの新京支店長の中村氏宅を訪ねた。彼は同じ隊で中隊こそ違ったが私と一緒に召集になった仲で、彼も帰京していると思つたら案の定帰つて来ており、お互い無事を祝つて乾杯し当分の間二人で炊事洗濯をやることにした。

わずか十日の間に出征家族並びに地方の有力者や会社の部課長の妻子はことごとく強制疎開させられ、行き先は全く分からない。私も早速会社に出社して妻の行き先を訪ねたが、全く分からないとのこと、そして満拓の公社の仕事もソ連の指示で停止させられ、地方の満拓社員、開拓団の動行をそれぞれ監督して資金の支給を行っていて、私も勤務の年月と給料に応じて約一年分の一万数千円をいただいた。早速略奪にあった被服の調達をし、毎日疎開者の情報集めと食糧の調達

を日課として、中国街や日本人街をうろついた。日本人街の道路の両側はあたかも氏神のお祭りのように屋台がびっしりと並び、金さえ出せば何でも買え、なんでも食べられた。街道には北満から引き揚げてきた女の人が腕に着物や反物をさげて売り歩いてきた。小学校の教室や中学、女学校の教室には北満から引き揚げてきた人々が何千人といて、金もないままそれぞれ働いて食べ、内地に引き揚げる時を待っていた。そのうちにソ連軍の悪い奴が強姦にやってくるそうで、彼らは皆が見ている前で堂々と強姦する。全く手におえないとのことで皆泣かされていた。このような生活を約一カ月ほどやっているうち、満鉄の列車の運転手が日本酒を売り歩いているのに遭遇し、早速、手元の現金で全部買占め、この次は何日にくるかと訪ねたら二日おきに奉天から来るというので、その度に約十本ずつ新京の駅に取りに行った。それを日本人街の一杯屋の屋台に売りさばくようになり、すっかり酒の卸し屋になり二カ月ほどで数千円もうけ、退職金と合わせて約二万円ほど貯蓄ができた。そろそろ疎開者救出を思い

だし満拓の本社に向いたら、私の妻たちの行き先がやっとなつかめて、非常に困っているとのことで、一回目と二回目と合わせて救出のため人を出したそうだが、救出のための金は二回とも失敗に終わったらしい。では、「私が決死の覚悟で行くから救出金と旅費を出してください」と頼んだが、「もう助けるための金がない」とのことと断られた。「では私個人で救出に行くが貴殿方の妻子のことは知りませんから左様心得てください」といつて別れた。

それから救出作戦の計画を立て、現在ソ連軍に勤務している満鉄の社員になりすますことを思いついた。帽子に作業服を買いこみ列車に乗ることを思いついたら、鉄道はほとんど軍用列車で朝鮮人の引揚者や北支からの労働者の引揚げで、ソ連の軍隊の監視のもとで走らせているので、容易に日本人は乗ることができないとのことで、「そこを何とかできないか」と頼んだら「機関車の上なら大丈夫」と言われた。「ではよろしく頼む」とお願いして十月の半ば、あの急行列車特急アジア号の機関車の釜の上に乗せてもらった。乗ったら高

いこと地上より約七、八メートルはあるかと思われ、そこには点検のための約二、三十センチの踏み板の鉄板が設けられていた。安心して歩けるので楽に座れた。もちろん昼間はすぐ発見されるので乗ることはできない。

夜行列車にて計画を遂行した。十月の半ばは満州の夜は零下何十度に下がるが、釜の上だから湯たんぽを抱えているようでちっとも寒さを感じず、翌朝、うす暗い時間に奉天に到着した。列車から降り、満鉄社員にお札をのべて街の中に消え、食堂で腹一杯食事を取り旅館でぐっすり寝て次の計画を練った。まず日本人が旅行するにはソ連軍のパスポートをもらわなければならぬとのこと。奉天の軍司令部は満鉄の本社を独占していた。その門には自動小銃を持った歩哨が立っていて、容易に入れそうもないので考えた末、歩哨に金を渡して「パスポート」と話したら、「行け」という合図をしたので、受付の日本人の通訳に、「実は満鉄社員だが家族が疎開しているので三十人引き取りに鎮南浦に行きたいがパスポートをお願いします」

と言うと、このパスポートは安東までで安東から先は安東でもらえとのこと。案外簡単にパスポートをもらえたので安東に行く。奉天より蘇家屯駅まで普通列車に乗り、ここで下車して次の列車まで徒歩で行かなければならない。なぜなら旅順から新京までは蒋介石の軍隊が占領していて、次の駅の呉家屯から安東までは共産軍が占領して、呉家屯には多数の共産軍がいるとの情報を得ていたので、約五里の道中を線路沿いに歩いた。線路の中は危険なので線路の両側の約三メートルの高梁畑の中を歩いた。約二時間にして呉家屯の駅が見えたので手を上げて駅に向かったら警備の兵隊が誰何したので、「私は日本人の満鉄社員だ」と答えたら、「しばし待て」と言われ、兵隊の上官が現れ上手な日本語で話しかけてきた。実はこれこれしかじかと話してパスポートを見せ、「安東まで行きたいので汽車に乗せてください」と頼んだら快く承知して、「列車の来るまでここで待ってください」と言われた。数字間待ってその間日本人といろいろ話をしたが、「なぜ共産軍に入って銃を持って戦うなんてあほなことを

なされますか」と尋ねたらその答えはなかった。多分日支事変に多数の日本人が捕虜になったことは聞いていたが、彼もその一人ではないかと思われ、逆に「あなたも共産軍に入れ」とすすめられたが、「今はソ連軍に使われてる身で家族が疎開しているため迎えに行く途中でそんなひまはないです」とことわり列車が来たので、私は客車の中に入らず機関車の運転席の側に座らせてもらい安東に向かって進んだ。本溪湖を過ぎトンネルを半分ほど出たとき「ガタン」という音とともに列車が動かなくなつた。下車して点検するとクラシクシャフトが折れたようだ。多分満鉄社員もいやいやながら働かされているので整備もろくすっぽやっていないと思われ、ここで約五時間ぐらい停車した。やっと交代の機関車が到着、こわれた機関車を牽引して引込線に退避させ、列車を牽引して安東へ安東へと走り、約十時間ぐらい走って到着した。

早速満拓の支所に行き、鎮南浦救出を話し、しばし宿泊するところを世話していただき、ここで北鮮に渡るにはどうしたらよいかいろいろ情報を聞き歩いた。

鉄橋にはソ連の歩哨が自動小銃を持って二人で警備しており、鉄橋の上を渡ることは困難で、鴨緑江は結氷してる。徒歩で対岸の新義州に渡るのは至極簡単なので皆渡つたそうだが、発見されれば銃殺とのこと、夜、度々銃声の音を聞き渡河の人が撃たれているのだなあと思い、これまた至難のわざで渡河のチャンスを開き歩きするうち約二カ月が過ぎ、十二月の半ばになり北鮮の連絡事務所を訪れた。

朝鮮語のパスポートを作製したり、ソ連の事務所を訪れ警備司令の許可のパスポートを得るべく通訳に話したところ、名前を見て、「貴殿は神代忠信さんの兄様ではありませんか、実は私の学校のクラスに神代忠信という人がいて、ごく親しい友達だった」とかここで実の弟の話が出て弟の様子を聞かれた。「消息は分からないままなのですが」と答えたら、神の加護がこの人たちが司令部の隊長とおぼしきものに熱心に話しかけ、パスポートを書かせ、持参してくれた。鉄橋の歩哨に見せ堂々と橋を渡つた。いつもは汽車であつたというまに渡つていたが、いざ歩くと結構時間がかか



り約二十分は歩いた。対岸にはまた歩哨が二人立っていて、例のパスポートを見せたら「よし」という一語で新義州に入った。徒歩で警察署を訪ねたら、ちょうど十二月二十八日で、例の御用納めで来年の五日にこいというこゝでやむなく日本人が抑留されている場所に行き、ここで五日まで泊めてもらった。このとき不幸にして私は高熱にうなされ倒れたらしい。自分は何も覚えていない。多分抑留者の皆様に手厚い看病を受けたと思います。そのお陰で五日には歩けるようになれ、皆様にお礼を述べ日本人街を出発。警察署に行き朝鮮語で書いた救出理由書を見せ、北鮮を歩く公用のパスポートをもらい、更に新義州のソ連司令部でパスポートをもらわなければどこにも行けない。結構図々しくなり、司令部で奉天の軍司令官のパスポートを見せたらなんなく簡単にパスポートを書いてくれた。いよいよ平壤へと切符を買い列車に乗った。旅は道連れか列車の中で「貴殿は日本人じゃないか」と話しかけてきた鮮人がいた。これが運のつきか、話に夢になつているとき、列車の中に私服の特高が乗っていた。

平壤で下車するやいなや駅前の交番に連行され、一晩留置され、翌朝九時に平壤の本署に連行された。青白い取調官が「君は逃亡兵ではないか」ときつい質問、「否」というとほつぺたをいやというほど殴られ、かねてから拷問にかけられるといううわさを聞かされていたので、いよいよ来るべきものがきたかと覚悟をきめていた。殴られた数は三、四十で顔は見るところにはれ上がり鼻血が出した。もうこれまでか死ぬなら相手の腰のピストルを奪って一発で殺し、自分も自殺しようとその隙ばかりをねらっていた。出血がひどくなりそれきり殴られなくなった。鮮人は血を見ると殴らないとは聞いていたが、やつとこちらの言い分を聞いてくれた。「実は満鉄の社員で貴国にお世話になっている家族三十人を連れ戻しにやってきましたんだ。このとおり、ソ連軍の許可もいただいている」と書類全部を見せると、やつとなつとくし、ソ連の本部に連絡をとったのか待つこと数十分。ソ連の憲兵（ゲーペーウー）が二人やってきて、パスポートを見せて行けという合図をしたので、取調官に「よいか」と問うたら何

も言わないで、「行け」というだけだった。やっと平壤署を退去した。

平壤の街を歩いていると東本願寺のお寺があったので中に入ると、満州や北鮮から南下してきて、ここで止められた人たちが、持ち物はすべて没収され、着のみ着のまま風呂にも入らずあかだらけで、異臭がぶんぶんする。本堂になんと百人ほど寝起きしている。足の踏み場もないくらいで、寝具もなく、なお、食事は湯呑一杯の高梁飯しか配給されない。おかずもなく小さい子供は皆、栄養失調になり、ばたばた死亡しており、やせ衰えた生存者の子供の姿を見てこれはひどいと思ひ、かくし持った金で街に出て甘いお菓子や食べ物を買って来てあげたら神様だと拝まれ恐れ入ってしまった。「私は平壤署でひどい取調べを受けてきたばかりで、顔はご覧のとおり腫れ、腫れがひくまで貴方方と起居を共にさせてくださいと頼み込み、ここで丸二日間滞りし、その間平壤市内をおおっぴらで視察させてもらい、あるビルの地下室の部屋に邦人がたくさんいるのを見つけた。偶然にも満拓社員で会

社から救出の金、約十万円と出張旅費をもらってきた人を見つけ、怒り心頭に達し、なぜこんなところなのか質問したら、自分は途中で全部金を没収された由、それは本当かどうか分らないが、私は刑事ではないのでそれ以上責めることはできないので、「この馬鹿野郎」と一言いって外に出た。私なんか、錢も没収されなかったのに、彼が取られたと嘘をついていると思つたが、實際金を持つているようにも見えなかつた。とにかく邦人の抑留生活は目にあまるひどい生活をさせられていたので、妻たちも同じようにひどいめにあつていると思ひ、心は早や鎮南浦へと走つた。

翌朝、鎮南浦行き列車に飛び乗り無事鎮南浦に到着した。日本人会の事務所を訪れ、これこれしかじかと話をして、満拓の人たちの居住は西本願寺の本堂ときいた。そこへ行つてみたら会社の人が私をみて驚いてわつと取り巻き、新京の事情を詳しく話してくれと懇願されたので、これ「私は皆様を救おうと会社に行き救出金の捻出を願つたが、私より先に、会社が救出のために二人を派遣したが、見事だまされて失敗した。

私もその同類と見られて一銭の金も渡されなかつたので、自分の金で約三カ月を掛けてここにきたのです。貴方を救出すべきは山々ですが、妻を助けるために命をかけてやってきたのです。なお、この鎮南浦に來ている新京の金持ちの方は一応、私の金で三十人は助けて行けると思い、金とパスポートを用意していますから、それは頭に入れてもらいます」といって、妻がいる江島産院に行った。妻と会い思ったより元気で、産院の叔母さんが家内とは遠い親類だったことも幸いし、これなら救出に來なくてもよかつたと思つたが、來た以上は連れて帰ることにし、三十人の人選を二日掛かりで決定し、引率者の阪巻君が是非一行に加えてくれといふので承知することにした。汽車の中には必ずソ連兵が乗っているので彼らが銃をつきつけて強姦にくるから、そのときは皆が一緒になって首に手を巻くくらいの行動をとってくれるように注意する。いよいよ、鎮南浦を出発するとき、ソ連軍の荷物検査が行われ、ある奥様が主人の勲章を持っておられ、没収された。ほかはなにごとくもなく無事終了し、三十人分の

汽車賃を支払い切符を手に入れ乗車して平壤まで到達した。ここで一夜を明かすことになった。私を殴つた特高が駅にいて駅の鍵がかかる特等室を使わせてくれたのには全く意外で感謝につきなかつた。ここに皆を待機させ夜の弁当を買い出しに街に出た。このとき、気が狂つた母親が街を歩き、子供を返せ返せとどなつて歩いているのを見掛けた。皆に夜食をとらせているとき、特高が入つてきて話すのには、日本の警察に約四十年ほど獄舎生活を送り八月の終戦の日によつと出獄した。罪名は朝鮮独立運動のかどだそうで、顔色が青白かつたわけが初めて分かり、日本人を見ると無性に腹が立つと言つていたが彼にも家族があるとみえて、私が女・子供三十人を連れてきたので便宜を図つてくれ、翌朝の列車に乗るときは一番先に乗車させてくれた。本当に彼には感謝しています。平壤駅の夜食・朝食は私の金でたくさん買い込んで皆に腹一杯食べさせ

た。  
列車は新義州へと走つた。その途中想定したソ連の兵隊がやつてきた。皆こわがつて手出ししないので、

妻を最初に接待させたなら、ほかの皆もよつてたかつてソ連兵を歓迎したので、彼はなにもせず帰つたが、その後、よほど嬉しかったのだろうか、なんとりんごを一箱持つてきてくれ、皆でたべるとあいさつして帰つた。皆久しぶりのごちそうをほおばつた。あだが幸いとなることもあるものだと笑つた。約五時間ぐらいつて終点新義州につき下車し、鴨緑江の橋まできて歩哨にパスポートを見せ、一人一人数をかぞえ三十一人いたので赤んぼうをおぶつていた奥様の赤ん坊は生まれただばかりだから数に入らないと身ぶり手ぶりでやつたものだから、さすがの歩哨も笑つてなんなく通してくれた。足もとに注意しながら歩き、約三十分かけて安東に入り、ようやく自由の身となる。満拓の事務所に全員休養することにした。約七日間静養したら皆の顔色が目立ってよくなつた。そして新京へ行く引揚列車を待つて乗車し、新京の一つ手前の孟家屯で下車した。あらかじめ安東の満拓事務所から本社に連絡が通じてあつたとみえ、皆が出迎えてくれていてまるで凱旋將軍のように感謝され、奥様たちの御主人が再会を喜び

抱きついているのを見て本当によいことをやつたと思ひ、感激した。皆とここで別れをつけ、それぞれ家へ戻り、私は妻と共に通化路というところにある社宅の一室を借りて生活をはじめた。

この社宅約二百戸くらいあるところの警備を中学の先輩の鹿兒島高商出身の故中島光次を隊長とし、実戦の経験のある私が副隊長で、社宅周囲を鉄条網で張り巡らし、出口は一個所でそこに警備室を設け出入りを監視し、ソ連軍や蒋介石の軍隊が入ってくるのを四六時間中監視した。我が部落はお陰でなんの被害も受けなかつた。ところが共産軍が攻撃に出て新京が戦場と化し、機銃小銃の音はもとより擲弾筒（大砲より小さいが、なかなか威力のある弾で殺傷能力が大）がピュンピュン飛んできて我が社宅にも一発命中した。幸い破裂せず不発に終わったので、その取り除き作業を私が行ひ、その弾を川に持つて行つて捨てた。また共産軍が我が社宅を襲撃しないよう弾のくる中を走つて、共産軍の隊長に談判に行き、「できる限り皆様の言うことは聞き入れますので、我々の社宅の方へは入らな

いでください」と頼みこんだ。そしたら「我々は飯を食っていないから握り飯を作ってくれ」とのことです。社宅に伝令をとばし、各家庭から二個ずつ至急握り飯をつくって警備室まで届けてくれとふれ回したら、すぐに数百個が集まり、それをリヤカーに乗せて弾のくる中を若い青年と二人で持つて行く途中弾がとんできた。若い青年二人はリヤカーを置いて逃げてしまった。やむなく私がリヤカーを押して共産軍の隊長のところへ届けたら、大いに喜ばれ、かくして我が社宅は安全を保たれた。共産軍が新京を占領したかと思いきや三日したら撤退してしまい、帰りがけに先の握り飯のお札にと白米一俵をいただいたのには大いに感謝する。皆に握り飯のお札をいただいた旨を知らせ、各人にそれぞれ二合ずつ配給した。我が団地からも朝早く商売に行く人が多くなり、生活の足しにして帰国の日を待ったのである。

共産軍との戦争の終了に我が公社の二宮総裁が拉致されたニュースが流れてきた。総裁はもと陸軍中將の予備役だったので拉致されるふしがあるが、総裁が我

が社宅にいたなら警備が厳重だったので、そんな心配もなかったが、とうとう総裁の消息は判明しないまま消えてしまったのである。その後、必死になって消息を聞き回ったが、徒勞に期してしまった。その後、新京の日本人会長から電話で妻子と鎮南浦から連れてきたお札にお金をもらい、並びにごちそうに呼ばれたが、奥様がすっかり変わって美しくなっていたのには驚いた。鎮南浦当時は頭髮には毛ジラミがわいて、顔は栄養失調で青白かったのが、御主人が新京の有名な医学博士であったので、手厚く看護されたせいもあって、子供たちも元気になっていた。本当によいことをやったとつくづく感じ、救出を行った苦勞もいつのまにか吹っ飛んでしまった。

そうこうしている間にどんどん、日がたち妻の腹が臨月になり、二月二十六日の夜男の子を産み落とした。これで父親という立場に入りうかうかできない状態となり、妻も疎開の苦しみで母乳が出ず粉乳で育てることにした。子供はどんどん大きくなり、笑いさえ見せるようになり、かわいくてかわいくてたまらなかつた。

だが貯蓄の金はだんだん無くなっていく。なにかあった場合困るので帰国費用として金一万円を妻に渡し、残金で商売することを考え、まず一番大事な白米を仕入れることを考え、吉林省の開拓団が作った米を買いに出掛けることにした。これはなかなか勇気がいることで強盗に遭ったら命も危ないが、それをも覚悟の上で決行し、約十俵の白米を買い馬車(三頭立て)にて約二日ばかりで運んできた。先輩の中島氏がびつくりしてよくやった、と喜んで警備事務所につめこみ、自分の分と中島氏の分を残した上で、残った米をごく安く売りさばき、見る見る十俵の米はなくなってしまう。これをくりかえすこと三回、帰国までの米は心配ないようにした。衣食は足りたが、じいとしていることができず、新京の町中を歩き回り、旧満軍の中国人の大將と知り合いになり、新京に建國運動をやるとういう計画が盛り上がり、あなたも協力しないかと誘われた。資金源をどうするかと尋ねたら、あちこちで賭場が開かれているのでそれを急襲すること。これは面白いとお供をしたら日本人の親分らしいのがいて

賭場をしきっていた。それを一網打尽に捕らえかけ金を没収し身柄は開放してやり、二度とかけ事をしないよう注意して帰った。かくして市内のそれらしい酒場を探し回っているうち、中国の軍隊の私服に捕まり牢獄に入れられた。幸いなことに金を握らせれば差し入れもなんでも自由で外部との連絡もとれたので、我が家に中国の軍隊の牢獄にいるから安心せよと伝えてもらい、中島氏と連絡をとり、かの満軍の大將に援助を請う旨を伝えた。

八月の半ばごろ、いよいよ引揚げと決定し、出発の前日理由もなく出獄させてもらい、妻並びに一子共々貨物列車の無蓋貨車に乗せられ一路錦州の先の壺蘆島に着く。馬小屋の中に寝かせられ船が来るのを待つこと二日目に乗船した。汽笛一声港を離れ、これまた二日目に待ちに待った祖国が見え、到着したところは長崎県の南風崎はなのかさきで、検便検査とDDTを吹きつけられシラム退治をさせられた。到着と同時に妻の実家に電話連絡をしたら、じい様が翌朝迎えに来たが検疫の結果コレラの伝染病の疑いで隔離ということになり、じい

様はそのまま帰られた。このとき、子供だけを授けておればよかつたがと残念に思うが、子供に与える粉乳がなくなり、近所の奥様のもらい乳をして育てたが、海岸のせいか夜は冷えるのがはなはだしく、ついに子供が発熱し急性肺炎をおこして一夜にしてこの世を去り、ここで火葬にされ遺骨だけが届けられた。思えば長男を亡くしたのが残念で残念でたまりません。ここに隔離されること二週間でやっと開放され、一人千円の金をもらって郷里に帰りついた。兄たちは北支から私たちより早く帰っていて兄弟そろって両親共々無事を祝った。幸い父が健在で、米軍の通訳をしていたので食べものには不自由しなかった。

### 【執筆者の横顔】

忠正氏は幼少のころから叔父の海軍小将の勇姿にあこがれたが、中耳炎で軍人になれず、その後、道草食っておくれたが、一念発起し猛勉強して三重県立農林学校に入った。三年の学業を終えて満州拓殖公社に入り土地部土地課に所属。北滿の密山県地区の測量に従

事していたさ中徴兵合格し、台湾の台北独立山砲連隊に入営し訓練をうけているうち大東亜戦争の勃発となり、南方方面の戦闘に参加して諸々方々の海洋戦に五年間も勤めて負傷もなく除隊の命をうけて無事帰郷した。

昭和十九年に満州拓殖公社に復職し開墾課に所属となった。翌二十年三月佐賀に帰り結婚。新京にもどり社宅で新婚生活を始めたたとんに召集令状が届いた。直ちに奉天の集合地の兵舎について装備の期間を待っている間に八月十五日の玉音を拝聴して皆と号泣する。たちまち軍を解除され、新京の社宅に帰ってみると妻は行方不明。社宅の部屋の中は狼藉に遭って盗られて何もない。

直ちに公社に行つて家族の行方を尋ねても皆目見当がつかない。結局情報により妻の一行は朝鮮の鎮南浦と分かった。ソ連と中国当局からパスポートを入手して新京を出発。新義州、平壤、鎮南浦の妻のいた江島産院にたどりついて妻と会えた。ここまでくるのにソ連の歩哨、朝鮮人の警察官から逃亡兵とみなされて要

所要所で殴るける拷問の残虐行為をくぐり抜けてきた経過は言語に絶する苦難の道のりであった。

神代氏は妻と三十一人の公社家族を引率してこの鎮南浦から新京の公社に着いたときは、まるで凱旋將軍のように感謝され命の恩人と言われた。

学職常職の豊かさの神代氏は対人関係の要領のよさ、機転をきかすことのできる天才である。こういう人を得たので救出できたのである。ただ、ようやく妻と子と三人無事に故郷佐賀の親もとに引き揚げたその喜びも束の間、一人っ子の愛児が肺炎に冒されて一夜にしてこの世を去ったのが今もって無念であると涙を流していた。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 古之助)

## 第一次武装試験移民の妻としての

### 引揚げの記

長野県 永井 かほる

渡満前

私は、長野県小県郡依田村（現在丸子町）の農家に、二男五女の末っ子として、明治四十四年七月二十九日に生まれました。

主人は、同村で明治四十二年十一月二十八日に、五男二女の長男として生まれ、昭和七年に満州に渡っておりました。

「女子青年団の方々は、公会堂へお集まりください」と村の女子青年のいる家々に伝えられたのは、昭和十一年四月のことでした。

この村から国策により、第一次武装試験移民として満州で生活している永井 昶しほる（後の私の主人）たちの日常生活の様子を小倉幸男氏が、家族招致のため、内